

### コウルリッジとドイツ文学(8)コウルリッジ とテイク

Takayama, Nobuo / 高山, 信雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004582>

## コウルリッジとドイツ文学（八）

——コウルリッジとティーク——

高山 信雄

## 一、はじめに

英独の文学的交流という点で、コウルリッジの果たした役割はたいへん大きなものがあるが、文学理論の上でロマン主義を高めたことは、当のイギリス文学はもとより、彼と意見を交換したドイツの文学者にも相当な影響を与えたかも知れない。とくに、ほぼ同時代にドイツにロマン主義の華を咲かせた、いわゆる前期ドイツ・ロマン派の人たちにとって、コウルリッジの存在は大なり小なり注目するものとなったであろう。とりわけ、コウルリッジと剽窃問題が取り沙汰されたアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルはもちろん、その同輩にあたる人々にも、コウルリッジはよく知られたイギリスの詩人であった。そしてそういう人々のうちに、ルードヴィヒ・ティークがいた。

ティークはコウルリッジと同じ時代背景に生きた人であるから、当然、コウルリッジと似たような思考をするところもあった。ティークはワーズワースと同じ八〇歳まで生きた人であるから、当時の文学界では長老といわれるようになり、大きな影響力を持つ人物となった。それゆえに、晩年のティークはドイツ文学界ではもつとも著名な

作家であつた。したがって、一九世紀の中頃までのドイツ文学界には、彼の存在は大きなものとなつていたといえる。

ティークは、コウルリッジと少なくとも二回は会っている。最初は一八〇六年にローマで会っているし、二度目は一八一七年にロンドンで両者は語り合っている。それゆえコウルリッジは、ほかのドイツ・ロマン派の詩人の誰よりも、ティークに親しみを持っていて、両者は友人の間柄であつた。

イギリス・ロマン派の雄コウルリッジと、ドイツ・ロマン派の筆頭ティークとが、親しく交流し、長い間にわたつて親交を結んでいたことは、英独の文学交流の面からみて、まさに特筆すべきことも知れない。そこで本稿では、この両者の文学活動を追いつながら、その出会いと再会を軸として、両者の足跡を調べてみようと思う。そして、ティークの作品をコウルリッジがどう受容したかを考察し、ティークの思想をどう捉えたかを、主としてコウルリッジの側から探つてみようと思う。

## 二、出会い

誰でも自国を出て言語や文化の違う外国へ行くと、大いに刺激を受けるものであるが、とくに青年時代の外遊は、精神の形成期において異文化の衝撃を受けるといふ点で、人の生涯の方向を決定づけることすらある。コウルリッジ二六歳のドイツ渡航は、そういう意味で彼の関心と興味を駆け、多方面への活動の契機ともなつた。

一八〇四年に、コウルリッジは健康を考へてマルタ島に転地療養を意図して出かけたが、そのこともまた、彼の世界を見る眼を拡げたといえる。彼はおよそ一年半ほどマルタ島で事務官として働いていたが、一八〇五年の秋に、マルタ島を去つてシシリ島へ渡り、そこからさらにイタリアへ行つた。

コウルリッジは一八〇五年一月二〇日には、ナポリへ渡つた。そこでネルソン提督率いるイギリス艦隊が、トラファルガー沖でナポレオンの連合艦隊を打ち破つたという知らせを聞いた。彼は一月末にはナポリを發つてサレルノへ行き、またナポリへ戻つて、そこでその年のクリスマスを過ごした。

年が明けて一八〇六年一月一日、コウルリッジは永遠の都ローマにきていた。それからおよそ二ヶ月余り、彼はこの古代と現代の混在するローマで過ごした。この南国の都ローマは、コウルリッジに大きな感銘を与えたことである。古代ローマ時代のコロセウムや公衆浴場などの建築物をはじめ、サン・ピエトロ寺院とミケランジェロの傑作などを見て、芸術的創造力について思いを抱いたことであろう。

イギリスは高緯度にあるため、冬は寒冷で陽は低く陰鬱な日が続くが、イタリアでもマルタ島でも、温暖な気候と長い日照時間とが、このイギリス詩人の気持を和らげてくれたであろう。イギリスの緯度は、日本付近にあてはめるとカムチャッカ半島に重なるところである。したがって、イギリス人だけでなくほぼ同緯度にあるドイツ人が、ルネッサンス発祥の陽の明るい南国イタリアに憧れる理由もよく理解できる。

ゲートもイタリアを旅行して詩的情感を新たにしたり、シュレーゲルもテイクもこの地に憧れていた。しかも一八世紀の末には、ギリシャ・ローマの古典時代に憧憬を持つ風潮がドイツにみなぎっていたことも、彼等の南方へのはやる気持を駆り立てたのである。

コウルリッジがローマで得たものは、歴史的な記念碑を目前にした感動だけではなかった。彼はこの地で、数人の知人を得たのであった。その一人は、アメリカ人の若い画家ワシントン・オールストーンである。オールストーンは当時ローマに住んでいて、この地で画家としての活動をしていた。コウルリッジはこの地で彼に肖像画を書いてもらったが、その絵はコウルリッジが帰国するときには、まだ完成していなかった。この肖像画は、現在オールストーンの姪の家に保存されているという。現在、ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーにあるコウルリッジの肖像画は、オールストーンがブリュッセルで書いたものだという。これは一八一四年の作である。

ローマで知り会った重要な人物の一人に、ヴィルヘルム・フォンボルトがいる。彼のフルネームは、カール・ヴィルヘルム・フォン・フォンボルト男爵といい、当時、彼はローマ法王庁に駐在するプロイセンの公使をしていた。彼はコウルリッジよりも五歳上の一七六七年生れで、ゲッティンゲン大学で法律を学んで官吏となったが、文学者としても優れた業績を残した人物である。彼はヴァイマルやイエーナに住んでいたこともあって、ゲートやシラーなどの文学者たちと深い交流があった。とくに、同い年のアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルと

は親交が深かった。シュレーゲルはゲッティンゲン大学で学びイエーナに住んでいたことがあったからである。このA・W・シュレーゲルを通じて弟のフリードリヒ・フォン・シュレーゲルとも親交があったし、同じゲッティンゲンで学んだテイクとも交流があった。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの二歳違いの弟、アレクサンダー・フォン・フンボルトは、ベルリンとゲッティンゲンの大学で学び、自然科学者あるいは地理学者として有名になったが、とくに世界各地を旅行して地球の自然について多くのものを学び、後世の学問体系を確立した。現在の自然科学の多くの分野で、彼が創始者と言われている。とりわけ海洋学・気候学における貢献は著しいものがある。

フンボルト兄弟は、当時すでに著名人であったが、兄のヴィルヘルムは外交的手腕もさることながら、文学にもたいへん造詣が深かったので、その方面でもよく知られた人物であった。とくに言語学の面では大きな業績を残していた。彼はイギリス文学もよく理解しており、コウルリッジとシェイクスピア談義もたびたび行なったようである。

フンボルトがローマに駐在していたのは、一八〇一年から八年までであった。したがって、コウルリッジが彼を知るようになったのは、彼がこの地に赴任して六年目のことであった。コウルリッジはフンボルト一家に温く迎えられて、ときおり会食を楽しんでいたらしい。

テイクはこのときすでに『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』(Franz Sternbalds Wanderungen)を書いていた。この小説は、ゲートの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(Wilhelm Meisters Wanderjahre)を模倣して、画家デューラーの若い弟子フランツ・シュテルバルトが、南岡イタリアでいろいろな体験をする話があるが、テイクはこの中で想像力を働かせて抒情的模写をしている。これは一種の芸術主義的小説であるが、ロマン主義的な感情のあふれるものである。南国への憧れは、この時代のドイツには共通のものであったから、彼も折をみてゲートのように南国に遊ぶことを夢みていたのであった。彼がローマに行きたいという気持を、これを書く当時から持っていたのも当然であろう。

この『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』は、シュレーゲル兄弟によって高く評価された。ドイツでは、この

当時ロマン主義が次第に興隆しつつあった。シュレーゲル兄弟は、その理論的側面に大いに貢献していた。そしてティークのこの小説が、彼等が考えるロマン主義の要求を満たしたものであったから、絶大な評価を与えたのであったが、横傲されたゲーテにしてみれば、深みのない浮ついた小説に思えたらしい。しかし、いずれにしろティークは、ローマに来る以前に、ドイツ・ロマン派の新星として、輝かしいスタートを切っていた。

コウルリッジはティークと、イギリス文学およびドイツ文学について、多くを語ったらしい。ティークは、シェイクスピアの翻訳を手掛けていたので、この作家については両者とも相当深い話をしたであろうと想像されよう。当時、ローマに来ていたティークの妹ゾフィー・ベルンハルディが語るところによると、一八〇六年二月六日にコウルリッジとティークとの会話において、シュレーゲルのシェイクスピア訳を、コウルリッジがたいへん賞讃していたというので、彼はすでにシュレーゲルのシェイクスピア訳を読んでいたのであろうと推察される。<sup>(3)</sup>

コウルリッジがローマでティークに会ったときの様子は、彼の記憶の中に鮮明に残っていたようで、一一年後の友人のジョン・フッカム・フレアに宛てた手紙で、ティークのことをこう述べている。

私たちはイングラントで、たいへん有名な一人のドイツ人の文人と数週間を過ごしました。この人は詩人および哲学の批評家として、大勢集まる熱心な人々のサークルを持つ点で、ゲーテに次いでいます。私はこの人とローマで知り合いになりました——この人の名はルドヴィヒ・ティークといえます。この人の文学的経歴は、ワーズワースの経歴と非常によく似ています。確かに私は、この両者の人となりをよく知っておりますし、ティークの作品を沢山読んでいますので、その天賦の才と多方面にわたる知識に関しては、躊躇することなし最高の賛辞で表現したく思います。ティークは自国の文学および古典の学識のほかにも、スペイン、ポルトガル、イタリア、イギリスの文学にも精通しています——事実、彼はヨーロッパのあらゆる国々の作家たちをよく知っています、その原典を読んでいます——しかもチオーサーからドライデンの時代までのあまり世に知られない作家たちも含むわが国のすべての作家をよく知っており、とりわけシェイクスピアの同時代人についての知識は驚くばかりです。<sup>(4)</sup>

コウルリッジはティークがイギリスの文学についてよく知っているので驚いているが、ティークは言語学者であるから、ヨーロッパの諸言語に精通しているので、その延長上にある英語についてもよく知っていて、シェイクスピアの戯曲の翻訳に一役買っていたのである。彼はやがて、シュレーゲルのあとを受けて自分の娘のドロテーアを助け、シェイクスピア全訳の偉業をなし遂げることになる。

フレアーへの手紙は一八一七年のものであるが、ティークの印象は強烈であったようで、彼のイギリス訪問を機にそれが再び甦ってきたといえる。いずれにしろ、ローマでの出会いは、コウルリッジに大きな感銘を与えたことは確かである。

フンボルトはローマで、コウルリッジにシュレーゲルの作品を紹介したらしい。そしてコウルリッジにシュレーゲルのスペイン語の詩の翻訳書を貸したようである。さらにフンボルトも、コウルリッジがシラーの『ヴァレンシュタイン』(Walenstein)の訳者だと知って、たいへん興味を持ったようである。彼にとつては、シラーが好みの作家であったからである。一方シュレーゲルは、イェーナでシラーと親しく交流していたので、シラーの名著を訳出したコウルリッジには、最初から興味を惹かれたことであろう。

実際、ティークはシュレーゲルに次いで、ドイツで有名なシェイクスピア研究家であった。コウルリッジはもとよりシェイクスピアの良さを認めていたので、ローマにおけるこの兩名のもつとも関心のあった話題は、おそらくシェイクスピアであったろう。

ローマでティークに会ったとき、コウルリッジはティークが詩人であることに気づかなかつたと言われている<sup>(5)</sup>。これはコウルリッジの友人であるクラブ・ロビンソンが伝える話であるが、もしこれが事実とすれば、コウルリッジはその当時、ドイツに興隆しつつあったロマン主義の風潮について、あまり関心がなかったのかも知れない。その理由としては、おそらく、戦時中のため大陸の文学事情がわかり難くなっていたことが挙げられよう。

ドイツにおけるロマン主義の抬頭は、イギリス・ロマン主義の発展とほぼ同じ時期であることは、たいへん興味深い事実である。イギリスでは、一七九八年に『抒情民謡集』(Lyrical Ballads)が刊行されて、事実上これがロ

マン主義復興の金字塔となったが、ドイツ・ロマン主義は、テイクの『フランツ・テルンバルトの遍歴』上梓の年一七九八年に始まったとみる人が多い。この年はまた、シュレーゲル兄弟によってイエーナで『アテネウム』(Athenum)という、ロマン主義を謳歌した最初の雑誌が刊行された年でもある。また、ドイツ・ロマン主義はシュレーゲルとテイクを軸に考えられるので、A・W・シュレーゲルがノヴァリスに会った一七九二年とも、テイクの最初の本の出版された一七九〇年に始まるとされることがある。さらに、ロマン主義に理論的な根拠を与えた本のひとつ、フィヒテの知識学(Wissenschaftlehre)が世に出た一七九四年を以ってドイツ・ロマン主義の開始とみる人もいる。しかし、ここでは前述のように、一七九八年を以って始まると考えたい。いずれにしろ、ロマン主義は、イギリスとドイツで同時発生的に起こったと考えて、まず差支えないであろう。そして、イギリス・ロマン派の立役者は、コウルリッジとワーズワースであり、ドイツではテイクとシュレーゲル兄弟であろう。

ローマにおけるコウルリッジとテイクは、こうしたロマン主義発展の過程における自分たちの存在を充分に意識していたので、この両者がそれぞれ故郷を遠く離れた異郷の地で、同じ志を持つ者を友人として交流したことは、大いに意義のあるところであろう。

### 三、テイクの業績とコウルリッジ

ローマでコウルリッジとテイクが出会ったのは、まったく偶然の機会からであったが、一度知り会うと、彼等はお互いとその仕事に注目するようになった。

コウルリッジはこれから以後、テイクに関心を払うようになった。広くヨーロッパの文学に通じているテイクと、古典やドイツ文学に深い関心を持つコウルリッジには、多分に共通する意識があったからであろう。それは抒情的で内面の思考を深く掘り下げる文学活動から生じるものであり、人間の主観的精神を尊び、精神の自由を重んじる詩的な態度であり、世の人のいうロマン主義的情感であった。

ヨハン・ルードヴィヒ・テイク、これは彼のフルネームであるが、このテイクは一七七三年五月三十一日、ベ



ルリーンで生まれた。コウルリッジとは、一歳違いということになる。したがって、ローマで出会ったときには、コウルリッジ三三歳、ティーク三二歳のことであった。

ティークの父は綱を作るマイスターであって、当時のベルリーンの一市民として生活していた。このころのベルリーンは、プロイセンの首都であって活気に満ちていた。というのも、プロイセンはフリードリヒ二世のもとで、経済的にも興隆していて、軍事的にも強大となり、ヨーロッパの列強と肩を並べるほどに発展していたからである。したがって首都のベルリーンの市民たちは、活力に満ちた生活をしていたようである。

ルードヴィヒ・ティークは、ティーク家の長男として生まれた。彼の下には二つ違いの妹ゾフィーと三つ違いの弟フリードリヒが生まれた。ティークの父は読書家で、歴史や文学に関する本が相当あったようで、ティークは文字が読めるようになるとう父の本を読んでいたという。そして、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(Götz von Berlichingen)は、この長男ルードヴィヒの愛読書になっていたらしい。

ティークは一七八二年に、九歳でギムナジウムに入學したが、このころから次第に演劇に興味を持つようになっていった。彼はいろいろな戯曲を読みあさったが、とりわけ感銘を受けたのは、出版されたばかりの、シュレーゲル訳のシェイクスピア劇であった。ティークはこの時期に、シェイクスピアから強い影響を受け、これから以後の彼の文学活動とその作品に、シェイクスピアが深い影を落とすことになる。

ティークはギムナジウムの高学年になると、創作をはじめた。このころ彼は、ベルリーンの学者や芸術家たちと交流する機会を得た。当時はサロンを中心とする社交の場が、知識人たちのたまりとなっていたが、そのひとつ、ライヒアルト家のサロンに、ティークは出席することができて、ここで多くの文人たちと知り会いになったという。彼はこの間に習作といふべき作品を沢山書きあげたが、その中には、一七九〇年に書かれた『アルマンツォール』(Almanzor)もある。前述のように、後にティークがドイツ・ロマン主義のさきがけとされたとき、この作品の作られた年代が一時代を画すものと考えられたこともある。しかし本格的なロマン主義文学を書くようになるのは、やはり大学を出てからであろう。

一七九二年に、ティークはギムナジウムを出て大学で学ぶことになる。ハレ大学とゲッティンゲン大学で神学を

学んだけれど、彼は親の薦める教会の聖職者にはなりたくなかった。彼はもっぱら文学を好んで学んでいた。とくにシェイクスピアにはますます興味を湧き、その演劇を研究しようとしていた。すでにギムナジウムにいたころに持っていたシェイクスピアへの関心は、やがて彼の将来の方向を決めてしまう。彼がゲッティンゲン大学で、シュレーゲルと同様、ハイネ教授に師事したこともあって、シュレーゲルとは親しかった。後年、シュレーゲルの後を継いで、ドイツ人が「われわれのシェイクスピア」と言うほどの翻訳本を完成するようになるには、こうした少年時代からのシェイクスピアへの憧れが、その原動力になっていたと考えられよう。

ティークは大学で、もうひとつ大きな収穫を得た。それは彼の生涯に大きな影響を残した友人との出会いであった。その友人とは、ヴァッケンローダーという学生であった。ヴァッケンローダーはティークと同じ年の七月生まれであるが、ティークよりさらにロマン的感情に優れていた。ヴァッケンローダーは、中世に憧憬を持ち、芸術と宗教の合一を理念とした。彼にしてみれば、古典主義者のヴィンケルマン的アポロ主義に対立して、ロマン主義者を中世的雰囲気のうちにかトリシズムに導くことが理想であった。

一七九四年に、ティークは大学を卒業してベルリンに戻った。そして、ベルリンのあるサロンで、A・W・シュレーゲルと知り合った。ここでの両者の出会いは、ドイツ・ロマン主義の誕生と発展に大きく貢献するものである。それはちょうど、ワーズワースとコウルリッジの出会いからイギリス・ロマン主義が発展していく過程と、非常によく似ていた。

一七九四年にティークが書いた『ウィリアム・ロヴェル氏の話』(Geschichte des Herrn William Lovell)は、書簡体の小説で理想主義者の主人公の精神的没落を描いたものである。ヴァッケンローダーに刺激されて、彼は中世に興味を抱くようになったが、その成果として『民話集』(Volksmärchen)を一七九七年に完成した。代表的な作品『金髪のエクベルト』(Die blonde Eckbert)や、あの有名な童話『長靴を履いた猫』(Der gestiefelte Kater)なども、このころ書かれたものである。

一七九八年の二月にヴァッケンローダーが病で死ぬと、ティークはかねてから彼と共同で書こうとしていた小説『フランツ・シュテルンバルドの遍歴』を、第二部まで書いて未完のまま出版した。翌年ティークはイエーナへ行

き、そこでドイツ・ロマン派を担う人々と盛んに交流することとなった。イエーナにはシュレーゲル兄弟もいたし、ノヴァーリス、ブレンターノ、シェリングなども住んでいたからである。こうして、イエーナ派といわれる詩人の一群が形成されることになる。このようなロマン派的雰囲気の中での、ドイツ・ロマン派の鬼才ノヴァーリスとの親交は、ティークの創作活動に大いに役立ったことは言うまでもない。しかしそのノヴァーリスは、一八〇一年に二九歳の若さで夭逝してしまった。彼は、ノヴァーリスの遺稿『青い花』(Heinrich von Osterdingen)の出版に甚力した。

ティークはこの年にイエーナを出てチュービンゲンで過ごし、一八一九年にドレスデンに移るまで、ここで創作活動をした。ここに二二年間住んでいて、一八四二年に再び故郷のベルリンに転居した。

このようなティークの生涯は、そのままドイツ文学の歴史の一コマであった。彼は啓蒙思想に批判の目を向け、古典主義にみられるアポロ的芸術観に背を向け、精神の自由を求めてロマン主義へと進んで、ロマン主義の発展に尽したあと、写実主義へと目を向けていく。コウルリッジはティークが写実主義に傾くころはすでに世になかったので、彼はロマン主義者の詩人ティークのみを対象に考えていたことであろう。

コウルリッジは後に、シェイクスピア研究者としてのティークを称えて、こう述べている。

……ティークの知識の幅の広さにおいてもその詳しさにおいても、私は自分を考えるとこの点では、まったく修業中の生徒並みだと思いません。シェイクスピアが書いたと思われる判然としない作品のどこかの詩行にでも言及すると、彼は複数の版でそれが書かれている箇所とページもすぐに示して、その詩行をくり返してくれることでしょう。

これはフレア宛の手紙に書かれているものであるが、コウルリッジがシェイクスピアに関するティークの知識に、如何に驚いているかがこれからわかる。

ティークの広範な文学的知識は、シェリングにも役立っていたらしい。シェリングが主観的観念論を展開してい

く過程で、ヤコブ・ペーメの影響は非常に大きいが、そのペーメの作品にシェリングが注目することになる経緯は、ティークの薦めがあったといわれている。これはティークが、イエーナに來た年のことである<sup>(8)</sup>。一方、コウルリッジはすでにクライスツ・ホスピタルの生徒であったところにペーメの作品に触れていた。

#### 四、再会

ローマでの数ヶ月間、コウルリッジはティークと多くのことを語ったであろう。しかしそれに関する記録は、あまり残っていない。というのも、コウルリッジがローマからほうほうの態で故郷へ逃げ帰ってきたからである。レグホルンの港から出港した後、敵の脅威におびえて、荷物の多くを海中に投げ棄てたり、出した手紙を乗せた船が沈められたり、いろいろな出来事があったことと思われる。したがって、コウルリッジが後年になってローマ滞在の時期のことを語るものが、彼の側の唯一の記録となっている。

ローマでの出会いから一年後の一八一七年六月に、コウルリッジとティークは再会した。ティークはイギリスに來てすぐに、コウルリッジに会うつもりであったようである。最初はジョセフ・ヘンリー・グリーン<sup>(9)</sup>の家で会ったらしい。グリーンはコウルリッジよりも一九歳も年下の一七九一年生まれであるが、これよりのちハイゲイト時代のコウルリッジのよき友人であり、また彼の良き弟子となった人である。彼は優秀な外科医で、將來が囑望されていた。一八一五年の一二月に、彼は王立医科大学(Royal College of Surgeons)を卒業し、外科医を営んでいた。哲学的思考が好きなので、ドイツ哲学を学ぼうとしていた。コウルリッジと親交のあったクラブ・ロビンソンが、このグリーンをコウルリッジに紹介したと思われる。グリーンはコウルリッジの広い学識と深い洞察力に敬意を抱き、彼の教えを乞うことになった。木曜会と名づけられた会合が、ギルマンの家で毎週コウルリッジを取り巻いて行なわれるようになったとき、グリーンもそのメンバーのひとりになった。

グリーンはティークに、ドイツへ行って医学を磨きたいと言ったところ、ティークはベルリン大学のゾルガー教授を紹介してくれた<sup>(9)</sup>。グリーンはこの年にドイツへ赴いて、一年間の修業を積むことになった。翌一八一八年

に、彼がベルリンから戻ると、コウルリッジとの交友関係が一層深まった。コウルリッジは一八一七年六月一四日付のトーマス・ブリー宛の手紙で、ティークとの再会について、次のように述べている。

私は昨日、リンカーンズ・イン・フィールドのグリーン氏の家で、シ・ティーク氏と共に、たいへん素晴らしい夕べを過ごしました。彼がロンドンにいる間に、ドイツ文学に関する友人たちの会合がもてればいいと強く望んでいます。

コウルリッジは書籍商のブリーに、ティークの著作で在庫があれば、是非ともそのすべてをハムステッドに持ってきてほしいと、この手紙で記しているので、ティークの訪英によってコウルリッジの彼への関心が高まったことがわかる。ハムステッドからコウルリッジが身を寄せていたハイゲイトのギルマン家は、比較的近い距離にあった。

ブリーへの手紙でわかるように、コウルリッジは六月一三日の晩に、ティークと久しぶりで旧交を温めあった。おそらくシェイクスピアをめぐる話を中心に、ドイツ文学の歴史と現状についての話題も出たであろう。

コウルリッジは、ティークにフレアを紹介したようである。ティークがイギリスに来た目的のひとつには、コウルリッジとの面会も含まれていたことであろうが、研究熱心なティークのことであるから、大英博物館での資料収集も、その目的のひとつであった。コウルリッジがフレアに送った手紙には、その間の事情がしたためられている。

……ティーク氏は大英博物館で、毎日、彼のために資料の書写をしてくれる人々と共に読書をしています。そして同じ目的のために、月曜日にはオックスフォード大学へ行き、そのあとはケンブリッジ大学へ行くそうです——そこでお願ですが、彼のためにこの両大学への紹介状を何とかして頂けませんか——ヨーロッパ大陸で受

けるにふさわしい名声（というのは、彼の名声は母国に限られたものではないからですが）を得ている学者であり詩人である立派な人物（洗練された紳士であることも付け加えていいと思うのです）が、シェイクスピアの國と國民から、その功績によって当然尊敬のしるしを受けるべきです。<sup>(11)</sup>

こうしてコウルリッジは、フレアに紹介状をもらって、ティークのオックスフォード、ケンブリッジ両大学の図書館での資料収集を助けようとしたのであった。

フレアは一八〇八年から翌年まで、スペイン全權公使を務めた人で、政界にも学界にもよく知られた人物であった。

一八一七年六月二四日、ティークはクラブ・ロビンソンとグリーンと一緒に、ハイゲイトのコウルリッジを訪ねている。コウルリッジは歓迎して、いろいろと話が弾んだようである。ギルマンもこれに加わり、彼等五人は午前中から夕方(12)の四時ごろまで文学や哲学について話をしていったようである。

ヘンリー・クラブ・ロビンソンは一七七五年生まれのジャーナリストで、三〇巻に及ぶ雑誌を作り、三五巻にも及ぶ日記を残している。日記作家という独自の分野を開拓した人物でもある。その疲れを知らない執筆ぶりは、皆の驚嘆の的であった。さらに書簡集や追憶随想など三六巻も書いている。彼はチャールズ・ラムやワーズワース等とも親交があり、コウルリッジの周辺の人々の共通の友人だった。

ティークは、コウルリッジの友人たちとも会いたがったようである。とくにサウジーには会って話をしたという希望を述べたらしい。一八一七年七月二〇日ごろと思われるサウジー宛の手紙で、コウルリッジはこう書いている。

拝啓

ひとりの天才は別の天才を理解するものですから、ティーク氏は貴兄に是非お会いしたいと言いつつ、したがって彼はどんなわずかなチャンスも逃したくないので、彼がパリに着くまでそこを去らないでほしい

と思います。そこで（この手紙もティーク氏に託して貴兄の許にお届けすることになるとしたら）、次のようなことだけは言っておかなければならないと思います。まず第一に、ティーク氏はローマで私にたいへん親切にしてくれた紳士です。第二に、彼は立派な人物で、道徳的に汚れた点や宗教面の不実さなどまったくない方です。第三に、詩人・批評家・道徳家として、彼は（評判によれば）ゲーテに次ぐ人です——そして私は、この評判は正しいものであると信じています——最後に、ティーク氏は、貴兄やワーズワース氏と同様に、ドイツではほん同じような人生を送ってきたに違いないし、現在もそのような人生を送っていることは、プリストルやケジックやグラスメアの仲間たちと共に、貴兄に興味を起こさせることでしよう。

敬具<sup>(13)</sup>

この手紙から、コウルリッジがティークにサウジーのことを称賛して語ったことが想像される。彼としては長年の友人に、是非ともドイツの天才的文人と会ってもらいたかったのであろう。

コウルリッジは七月四日に、オックスフォードに滞在していたティークに、ハイゲイトから手紙を出している。

私たちが別れてからあなたがオックスフォードへ行くまでの間がたいへん短かかったので、あなたに、推薦状を持たせてあげられなくて申し訳ありません。しかし私は決して忘れていたわけではなく、私が送る代わりに、J・H・フレア氏（イペリア半島でイギリス大使を務めていた人です）からの書簡の中にそれを見出すことでしよう——それにもうひとつ追加しなければならないことは、私の甥（W・H・コウルリッジ）があなたの宿に手紙を送ったことです。それを是非受取るようにして下さい。それはオックスフォード大学のある図書館員に宛てたものです——長い夏休みの間はどの大学も少数の人々しか残っていないでし<sup>(14)</sup>ょう。

この手紙から察するところ、フレアに書いてもらった紹介状は、ティークがオックスフォードに出立するときまでに間に合わなかったらしい。そこでフレアがティークの方へ送ることになったようである。一方、甥のウィリアム・ハート・コウルリッジは、コウルリッジとは七つ違いの兄、ルーク・ハーマン・コウルリッジの子である。こ

の兄は将来を嘱望された若い医師であったが、二四歳の若さで突然他界してしまった。そのとき彼はすでに妻セラ・ハートとの間に一歳になる男の子をもうけていた。この子がウィリアムで、彼は長じてオックスフォードで学び、後にバルバドスとリワード諸島のビンショップとして赴任することになる。ウィリアムはオックスフォード出身だから、この地の図書館員をよく知っていたわけである。

コウルリッジは七月四日付のティークへの手紙の中で、ニュートンとゲーテの光学と色彩学の問題に触れ、さらにメスマーの動物磁気のこと言及している。こうしたことがティークとの間で話されたのかも知れない。

ティークがハイゲイトへやってきたとき、ティークの話し振りを、次のように書き留めている。

……ティークは、英語をたいへん楽しそうに話します。しかしながら、各人が母国語で話す方がずっといいときには、数分間まったく気づかずに両者別々の言語で話をしていました。そういうことが生じるのは、話している言葉が、精神的な翻訳という媒介がなくして、考えていることを各人によく伝えているときです。<sup>(19)</sup>

ティークのイギリス訪問は、本人にも大きな収獲があったことは当然であろうが、コウルリッジの方も、久々の友情を温めつつ、ドイツ的な思索を練るティークが、イギリスの国民と文化をどう見ているかということにも興味があったであろう。シェイクスピアの国でないドイツから来たこの劇作家を見る眼は、また新鮮なものがあったであろう。

こうしてティークのイギリスへの旅は終り、彼はイギリスの友人たちのもとに大きな足跡を残して、七月二二日にドイツへ帰っていった。彼のイギリス訪問は、コウルリッジに再び彼への関心を呼び起こし、コウルリッジの眼を、いまやドイツで隆盛を極めているドイツ・ロマン派の詩人たちに向けさせたといえる。



## 五、ティークの作品をめぐって

コウルリッジはティークの訪英を機に、彼の作品を読もうと思つて書店に注文したけれど、すぐに手に入ったものはそう多くはなかったようである。六月二〇日にロビンソンへ宛てた手紙では、ティークの『ウィリアム・ロヴェル』と、ティークによって出版されたヴァッケンローダーの『芸術に関する幻想』(Phantasie über die Kunst, für Freude der Kunst)の二冊しか持つていないと言つてゐるが、二月二日のグリーン宛の手紙では、『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』についても触れているし、ティークの詩についても触れているので、この年一七七年には、ティークの著作を相当読んだことと思われる。

このグリーン宛の手紙では、コウルリッジは『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』を読んで、こう述べてゐる。

——私たちの友人が書いた『シュテルンバルト』は、私にはそれほど好きになれません——この作品は、あまりにもハインゼの『アルディングヘロと至福の島』を模倣し過ぎてゐるようである。そしてもしローマにおけるその画家の庭の情景模写を読んで、前記ハインゼの作品でこれに相当する嫌悪感ほどにはあまり嫌な感じがしないとしたら、それは感受性が鈍いのでしよう——つまり、それはみだらな白昼夢で、その夢の中で夢を見ている人が、同時にあくびをしたりもぞもぞしたりしてゐるようです。<sup>(16)</sup>

コウルリッジがここで述べてゐることは、おそらく正しいであらう。この作品は、先に述べたようにシュレーゲルが称賛し、傑作と言われていたものであるが、ティークが世を去つてからは、あまり大きな評価は与えられなくなつてしまつた。ロマン派の作品にふさわしく、抒情性と空想とに富むものであるが、あまりにも散漫な構成であるため、濃厚な内容とはなり難く、ゲーテにこの点を批判されてゐた。海を隔てたイギリスで、同時代のコウルリッジにも凡作のように思へたのは、やはり彼の批評眼の鋭さを示すものであらう。ところでハインゼ (Wilhelm

Heinse)は一七四六年生まれのドイツ詩人であつて、美や心の満足感などを歌いあげた人であり、この『アルディンゲンと至福の島』(*Ardinghelo und die glückseligen Insel*)は一七八七年に書かれたもので、ルネッサンス的な芸術家小説である。彼は一八〇三年に世を去つたので、コウルリッジが話題にしたときには、すでにこの世の人ではなかつた。しかしこのハインゼは、一般のドイツ文学史ではまずほとんど取り上げられないくらいマナーな詩人であるが、コウルリッジがこの詩人の作品を知つていたことには驚く。

ティークが訪英した年の一月に、コウルリッジは『ザポリリア』(*Zapollia*)という戯曲を出版したが、その中でみなし子の少女グリシンが歌う詩は、ティークの詩を翻案したものと考えられている。コウルリッジの『備忘録』の二七九一に、その原型とみられる次のような記録がある。

On a day when the Sky had but few lines & openings of Blue

Field inward flew a little Bird and poisoning herself in a column of Sunshine

Sang with a sweet and marvellous voice.

Adieu! adieu! I must away——

Far far away!

I must set off to-day.

(数条の雲しかなく 青空の広がるある日、

その空の下の野で 一羽の小鳥が一条の陽光を浴びて飛び、

きれいな素晴らしい声で 鳴いていた。

さようなら! さようなら! 私は去らなければならない——

はるか 彼方の地へ!)

私は今日 旅立たなければならない。)

I listen'd to this sweet, strange song,  
 Listen'd and gaz'd—Sight of a bird! Sound of a voice!  
 It went so well with me mir war wohl und doch so bang  
 With gladsome Pain, with painful Gladsomeness.  
 Alternate rose and sank Bosom/  
 Heart! Heart!

Breakst Thou for Joy or Smart?—

(私はこのきれいだが耳慣れない声聞き、  
 聞き耳を立て、見つめていた——小鳥の姿を、小鳥の歌声を、  
 気分は良かったが、楽しい苦痛、  
 苦痛に満ちた楽しさで、たいへん不安だった。  
 私の胸は、わくわくしたり沈んだりした、  
 心よ、心よ、  
 喜びか苦痛で、破れてしまうのではないだろうか。)

Yet, when I saw the Leaves fall, and all was cloudy,  
 Then said I, Ah! Autumn is here/  
 The Swallow, the Summer Bird, is gone/  
 And so will my Beauty fall, like the Leaves,  
 From my pining in Absence/  
 And so will his love fly away, like the Swallow——Away!  
 Away!

Swift as to day.

(しかし 葉が落ちて空が曇っているのを見て、

ああノ 秋が来た と私は言ったノ

夏の鳥のツバメは 去ってしまったノ

私の美しさもまた 木の葉のように 去ってしまうだろう、

我を忘れて 想い焦れているうちにノ

それゆえに彼の愛は ツバメのように飛び去っていくだろう——遠くへノ

遠くへノ

一日が早く過ぎるように 早く去っていくだろう。

But lo! again came down the column of Sunshine,

And close by me pois'd in the column sang the sweet Bird again——

And looking in my tearful face

Sang

Love has no winter/

No! No! No!——It is never true & is always Spring——  
(7)

(しかし見よノ 再び陽の光の筋がなしてきて、

私のすぐ傍でその光の筋を浴び あれ可愛い小鳥がまた囁いた——

そして涙で濡れた 私の顔を覗き込んで

こう歌い出した

「愛には 冬などありません」

そうだともし、そうだともし、それは常に真理で、いつでも春なのだ——

この『備忘録』の記録は、ティークの「秋の歌」(Herbstlied)の最初の翻案ないし翻訳の原稿と思われる。この両者の詩について、マックス・シュルツが比較考証を行なっているが、それによると、コウルリッジが『備忘録』に書き残した第三連の部分は、ティークの次の詩とほぼそっくりだという。

Doch als ich Blätter fallen sah,

Da sagt' ich: Ach! der Herbst ist da,

Der Sommergast, die Schwalbe, zieht,

Vielleicht so Lieb' und Sehnsucht flieht,…… (21)

(木の葉が落ちるのを 見たとき)

私は言った、ああ、秋が来た。

夏の客であるツバメは 去っていく、

おそらく愛と憧れも 去っていくだろう。)

ティークの使っている「木の葉」「秋」「ツバメ」なども、コウルリッジもそっくり使っているし、愛の消滅もモチーフとして共通である。

さらにシュルツは、第四連の最後の部分も、ティークの次の詩行と同じものだと考えている。

Die Liebe wintert nicht,

Nein! nein!

Ist und bleibt Frühlingseschein (22)

(愛は 冬にならぬ。)

そうだとも！ そうだとも！  
春の光が 常にある。）

ここからもわかるように、コウルリッジはティークの詩を完全に翻訳して手を加えている。この詩の原典としてコバーン女史の指摘するところでは、これはシラーの主筆する雑誌『詩人年鑑』(Musendmanach)の一七九九年発行の二六号に載せられたものを、コウルリッジが見たのであろうという。さもなければ、もっとも可能性のあることとして、『備忘録』のこの記録は、一八一七年にティークが訪英した折に、ティーク自身がコウルリッジに示したのではないかと考えられると、コバーン女史は述べている。いずれにしろ、コウルリッジはティークのこの詩が気に入ったようで、この『備忘録』の記録から後も、これについて再考をしている。

この詩の途中に示されたドイツ語を含む詩行は、コウルリッジがこれを部分的に英訳して一部を残しているのであるが、敢て強調するためか、あるいは再度考えるためにそうしたのであろう。実際にこの詩の思想は、『ザポーリア』の中でそのまま生かされている。この劇の第二部の二幕二場でグリシンが歌う詩は、次のようなものである。

A sunny shaft did I behold,

From sky to earth it slanted:

And poised therein a bird so bold——

Sweet bird, thou wert enchanted!

(空から地上へと 斜めにさしてくる

一条の日光を 私は見ていた。

そのとき健気な一羽の小鳥が その陽光の中に飛び込んできた——

可愛い小鳥よ、おまえは魅力的だ！

He sank, he rose, he twinkled, he trolled  
Within that shaft of sunny mist;

His eyes of fire, his beak of gold,

All else of amethyst!

(その小鳥は 陽光の霧の筋の中で

降りたり 上ったり 光ったり 囀ったりした。

その両眼は火のように燃え、その嘴は黄金のようで、

それ以外のところは、アメジストの紫色だ！

And thus he sang: 'Adieu! adieu!

Love's dreams prove seldom true.

The blossoms they make no delay:

The sparkling dew-drops will not stay.

Sweet month of May,

We must away;

Far, far away!<sup>(R)</sup>

Today! to-day!

(そしてその小鳥はこう歌う。「ちようなら、ちようなら!

愛の夢は 滅多に本当ではないことがわかります。

愛の夢は 愛の花を咲かせるのを遅らせません。

でも露のしずくは いつまでも留まっていけないでしょう。

五月という 甘美な月に

私たちは 去らねばなりません。

今日にも！ 今日にも！

はるかな彼方へ 去らねばなりません。」

このように、コウルリッジはティークの「秋の歌」を巧みに利用して、この詩を作ったと思われる。この詩は「歌——『ザボーリア』より」として、アーネスト・ハートリ・コウルリッジ編の『詩集』(The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge)に載せられている。このコウルリッジの詩は、最終的には一六行の詩としてまとめられているが、『備忘録』に書かれていた詩より、はるかに緊張感があり哀感の漂よう見事な詩となっている。前の詩は四連構成で、小鳥の模写にも冗長さが目立つし、全体が緩慢に映るけれども、最終版の「歌——」には、見事な韻律の美と共に、情感があふれているように思える。

またシュルツの指摘するよう、コウルリッジは、ティークの詩にある諸々の対立要素を、そっくり自分の詩に採り容れていると思われる。つまり、夏と冬、日光と曇り、愛の充足と愛の消滅、小鳥の楽しさと話者の憂鬱さなどの対立である。コウルリッジはこれらの対立要素を巧みに自分の詩に生かしている。

## 六、思想について

コウルリッジとティークは、共に同じ時代を生きた詩人であったから、その考え方にも共通するところがあっても当然かも知れない。この両者は、人間の理性よりも感性を重要視し、心の自由を謳歌して詩作した。コウルリッジは想像力を十分に活動させて、超自然的特質を持つ作品を書いたけれど、ティークもまたメルヒェンを活用して、ロマン的なアイロニーに満ちた作品を多く残した。ティークの作風には、諷刺や機智の要素が多く見られる。ティークは、コウルリッジ以上に気ままに書いているし、ときには役者や見物人に、その本来の役割を逸脱するようなドラマ技法を採用したりしている。



テークはシュトルム・ウント・ドラングの潮流がほほ終るころに、独自の文学活動を開始した。そして古典主義へと時代が大きく変わっていくところに、ロマン主義文学を展開した。彼は後年、次第に写実主義の色彩を強めていくことになる。彼はドイツ文学史上、四つの段階の中を生き続けた詩人であり、彼自身もこの間に大きな思想の変遷を経験している。この意味から、彼ドイツ文学の歴史の上で、もっとも流動的で激しい時代の証人でもある。

一方、コウルリッジは、徹頭徹尾ロマン派詩人であり、ロマン派的批評家であった。彼はイギリス人でありながら、渡独を機にドイツ文学とその思想的基礎をなすドイツ観念論哲学を吸収して、独自の思想体系を確立し、イギリスに観念論哲学を紹介した。テークと同じようにカント哲学にも神学にも深い関心を持ち、神秘的思想家のヤコブ・ベームに大いに興味を持った。

実際にテークは、ベームを好んで研究していたようであり、シュレーゲルはそのことの証人となっている。<sup>(21)</sup> シュレーゲルにベームの書物を読むように薦めたテークではあっても、彼自身どの程度ベームを理解し、それを自己の体系のうもに採り容れていたかは定かではない。むしろ、ベームを読むことが一種の流行であった当時の風潮に、テーク自身も一時的に興味を惹かれたのかも知れない。既述のように、コウルリッジはこのドイツ神秘思想家に、すでにクライスツ・ホスピタルの生徒であったころから関心を持って、その作品を研究していたという。彼はこのことを、テークへの手紙の中で述べている。<sup>(22)</sup> したがって、テークがベームに関心を持つ以前から、コウルリッジはベームの作品を読んでいたといえる。もっともこれは、ウィリアム・ロウの英訳本によるものであった。

コウルリッジのベームへの関心は青年期に一層深まり、この作家について何かを書こうとした足跡が、すでに一七九五～六年のころにあつたらしい。<sup>(23)</sup> 彼はどうやらテークよりもずっとベームのことを知っていたし、ベームを研究し、消化して、自己の体系の中に生かしていると考えられる。「……ベームについては、私自身が評釈者になつてきています……」<sup>(24)</sup> という彼自身の言葉が、それを裏付けている。

一八一七年にコウルリッジが再会したとき、動物磁気が彼等の話題になったことがある。これはウィーンの医師アントン・メスマーが唱えたもので、現代風言えば一種の催眠術であった。彼は神秘思想に深い関心を持ち、占星術を信じて、星が人間の活動に大きな作用をもたらすと考えた。そして、その星の力を人間に伝えるものが磁気

であるとした。こうして磁石を用いて星の力を人々に作用させ、彼の患者を安らかな睡眠に導いた。彼は生体に作用するこの磁気力を「動物磁気」と名づけた。またこれは、メスマーの唱えるものゆえ、メスマリズムとも言われた。

ティークは神秘的な思想や現実を好んだので、この動物磁気にも強い関心を持っていた。折しも、一八一四年にはK・G・ヴォルフアルトが『メスマリズム』(Mesmerismus)を著わし、一八一五年にはC・A・クルーゲが『動物磁気技法の試み』(Versuch einer Darstellung des animalischen Magnetismus)を出版しており、コウルリッジもこれに目を通していたので、ティークはこの動物磁気について話を聞いたのであった。コウルリッジが、ドイツで現在、科学者がこれを肯定し、その価値を確信しているかどうかを訊いたところ、ティークは、明白にその存在と効用を信じていたようである。しかも彼は、この人体に作用する磁気について、自ら証人となってコウルリッジに語っている。

コウルリッジは、ロマン主義者とはいっても、物事を理論的に処理しようとする努力を払っていた。したがって神秘思想にもメスマリズムにも、長い間の考察によって批判的になっていくが、ティークは論理的思考をあまり好まないように思われる。こうした思考パターンの相違が、一方は一貫した情感豊かでロマン主義の枠内での、想像力に満ちた作品を残し、他方は、散漫とも思われる思考の赴くままの作品を残したことに、大きく作用しているであろう。

コウルリッジとティークのこうした相違は、もちろん内向的で内省的な性格を持つ前者と、外向的でサロンを主宰し、ゲーテ亡き後、ドイツ文学界に君臨した親分肌の後者との、性格的相違も大きく影響している。

しかしそれ以上に、コウルリッジがすこぶる哲学的であり、意識的・無意識的に形而上学的思考を絶えずしていたことも、ティークとは違っている。ティークも神学を学び、形而上学的思考にも慣れていた筈であるが、彼の努力は悟性の活動と抒情的感覚美探求の方向に向けられた。そしてコウルリッジのように感覚を超越した世界に遊んで、理性の総合的統一作用のもとで、直観を重視した創作活動を、ティークはそれほど思えない。

ロマン主義者としてのティークの創作活動は、主として民話に基づいた幻想的な話が中心となり、現実の世界に

ついで考えるよりも、メルヒェンや民話という、どんなに奇妙なことが起こっても不思議ではない世界に、初めから入り込んでしまっている。この時期の彼の思想には、現実からの逃避がはっきりと見られ、そこにロマンティック・アイロニーという彼の持前の特技が生かされているように思える。

一方コウルリッジは、まったく作者の頭脳が作り出す想像の世界で活躍する。彼独自の想像力の活動によって、創作が行なわれるのであり、それは自らが述べるように、すこぶる哲学的背景を持っている。もちろんそれは、形而上学的な概念であるが、その基盤には、彼がドイツ観念論哲学から吸収した客観的観念論の思想がそこにある。ドイツ人のテークよりも、カントをよく学んで自分のものにしていて、シェリングをその友人のテークよりもよく消化し、批判している。コウルリッジの文学活動は、こうして観念論哲学に支えられていて、自己内部の主体としての意識と客体としてこの無意識の極理論的合一から、想像力の活動によって作品を生み出している。現実逃避のアイロニーよりも、むしろ想像力の純粹に芸術的な活動の所産として、詩が生まれている。芸術のための芸術という点から見ると、コウルリッジは、まさに純粹に芸術家といえよう。

## 七、むすび

イギリス・ロマン派を興隆し、自らもつともロマン的な作品を残したコウルリッジと、ドイツ・ロマン派の旗手をした者のうち、当時もつとも著名であったテークとの出会いは、そのままイギリスおよびドイツのロマン派文学の出会いでもある。

ローマにおける最初の語らいは、英独のロマン派文学の接点であり、しかもそれが、ヨーロッパ大陸にナポレオン旋風が吹き荒れている戦時下起こったことも特筆すべきことである。この時代には、イギリスとヨーロッパ大陸との文化的交流は、非常に難かしかったが、奇しくもコウルリッジとテークは故郷を遙か離れたイタリアの地で、二ヶ月余りの交流をした。このことは、両者もとより、両国のロマン派文学にとつても、素晴らしい出来事であった。

ティークの仕事は、当時のドイツで称賛されていたし、これに刺激を受ける作家も多かった。しかし彼自身のロマン的傾向は、友人ヴァッケンローダーの影響が大きいし、後にはノヴァーリスにも影響された。ドイツでもっともロマン的な作家であるこの二人の影響下に、ティークのロマン主義文学が発展していった。しかし、コウルリッジは、ティークの偉大さは認めつつも、彼の欠点をしっかりと見据えていたのである。

ロンドンでの再会は、コウルリッジにティークへの関心を駆り立て、その作品を読む機会をもたらした。ティークの「秋の歌」は、コウルリッジの戯曲、『ザボーリア』に早速採り入れられて変容し、グリシンの「歌」となった。

両者はロマン派詩人という点で似たようなところもあるが、その思想においては根本的に違うところがある。それはコウルリッジはロマン派文学をしっかりとした形而上学的な基盤で支えているが、ティークには強い論理性が背景にない。そのためティークの思想は変遷することになる。最後までロマン派であり続けたコウルリッジと、この点で大きな違いがある。

しかしながら、一九世紀初頭におけるコウルリッジとティークの出会い、英独の文学的交流という面から見ると、非常に大きな足跡を残したといえよう。

## 註

- (1) James Dykes Campbell, *Samuel Taylor Coleridge—A Narrative of his Life* (London: Macmillan & Co., 1894), p. 150.
- (2) *Ibid.*, 150 n.
- (3) Donald Sultana, *Samuel Taylor Coleridge in Malta and Italy* (Oxford: Basil Blackwell, 1969), p. 387.
- (4) *CL*, IV, 744.
- (5) *The Philosophical Lectures of Samuel Taylor Coleridge* (New York: Philosophical Library, 1949), p. 465.
- (6) Lawrence Hanson, *The Life of S. T. Coleridge—The Early Years* (New York: Russell & Russell, 1962), p. 333.
- (7) *CL*, IV, 744.

- (8) *BL (CC)*, I, 161 n.
- (9) Campbell, p. 231.
- (10) *CL* IV, 538.
- (11) *Ibid.*, IV, 746.
- (12) Lucy E. Watson, *Coleridge at Highgate* (London: Longmans, Green & Co., 1925), p. 55.
- (13) *CL*, IV, 753-754.
- (14) *Ibid.*, IV, 750.
- (15) *Ibid.*, IV, 744.
- (16) *Ibid.*, IV, 793.
- (17) *CN*, II, 2791.
- (18) Max F. Schulz, *The Poetic Voices of Coleridge* (Detroit: Wayne State University Press, 1964), p. 173.
- (19) *Ibid.*, p. 175.
- (20) *PW*, I, 426-427.
- (21) Thomas McFarland, *Coleridge and the Pantheist Tradition* (Oxford: Oxford University Press, 1969), p. 248.
- (22) *CL*, IV, 751.
- (23) McFarland, pp. 248-249.
- (24) *CL*, III, 278.
- (25) *CL*, IV, 745.

【コウルリッジの著作の略記等は、すべてプリンストン版全集に準拠する。】